



ガンバッテいきます



JAあじきたファーマーズ
マーケット「こぼん」
出荷者
川口 幸江さん

●本業はかんきつ、副業は野菜
川口さん宅では、甘夏と不知火を80a、米を5a作っています。また10aの畑に、色々な野菜を作っています。直売所へはこの野菜と手作りの漬物を出荷。もともとは自家用でしたが、出荷するようになってから、徐々に作付を広げていきましたとのこと。

夏はナス、ピーマン、キュウリ、トマトなどを作り、秋から冬にかけては、大根、高菜、ブロッコ

リ、キャベツ、人参、ホウレンソウ、菜花、アスパラガスなどを作っています。野菜は朝採りして、新鮮なものを出荷していますとのことでした。

●青空市から直売所へ

以前は、JAあじきた女性部で青空市を始め、川口さんも参加していました。青空市は月2回開催でしたが、好評だったので、週1回、週2回と回数を増やすことになりました。その後道の駅「たのうら」の物産館「肥後うら」が開店。4年前に「こぼん」ができるまではそこに出荷していました。

川口さんは「直売所は生きがいです。朝採りの野菜や漬物が美味しかったというお客様の言葉が、

とても励みになります」と話してくれました。

●漬物について

川口さんの漬物は、お義母さんが病弱だったため、結婚直後から試行錯誤しながら作ってきたものだそうです。自宅に加工所を作り、自家製みそや糠を使って、青空市の時から販売していました。

現在は、大根、人参、しょうがのみぞ漬け、大根の糠漬け、季節の野菜の一夜漬け、ラッキョウ漬けや梅干しなどを作っています。収穫した大根や人参を、季節や漬物の種類に応じて漬け込みます。「出荷する数は日によって違いますが、今日は高菜23パックと大根のみぞ漬け31パックを出荷しま

した」という川口さん。少人数向けには、小さなパック詰めにするなど工夫しています。「年間を通じてみぞ漬けを出したいけれど、自家製のみそと野菜のみぞ漬けているので、なかなか難しいです」とのことでした。

●こぼんからの抱負

川口さんは農水省認定のエコファーマーであり、また熊本グリーン農業「環境にやさしい農業のグリーン農業マークも取得しています。「できるだけ化学肥料を控え、「こぼん」にまた買いに行きたいと思われるような安全・安心で新鮮な野菜と漬物を作って出荷したいと話してくれました。



JA熊本つき 施設園芸
農家
平田 正則さん

宇城市小川地区で、トマトとメロンを栽培している平田正則さん（58歳）を取材しました。
平田さんは、昨年までJA理事を務め、現在は、平成10年に設立した地元の農事組合法人の、初代からの組合長としても活躍されています。

●土づくりからスタート

平田さんは農家の長男として生まれましたが、測量専門学校を卒業後、測量設計会社に就職。いずれは自分の会社を立ち上げる計画でいました。しかしある時、親戚の叔父から「後で帰ってくるよつであれば、その時は家と土地を親から買って住め」と言われ悩んだ末に26歳で就農しました。就農はしたものの、「近所の農家の

人たちが話す、農業の専門用語は全く理解できなかった」と言います。この時が一番辛かったと言い、負けたくない思いで頑張ってきたそうです。当時から、トマトやメロンを栽培していましたが、青枯れ病が頻発し、思うように生産量が上がらなかったそうです。そこで、専門書を色々読みあさり、「有機質の土づくり」に解決の道を見出したと言います。そして、その土を施したところ病気が発生しなかったそうです。今では、米ぬか、もみから、馬糞、JA堆肥などをミックスし発酵させ、年間約50トン生産。10a当たり3トンを目安に施肥し、減農薬栽培を行っています。

●労働力を平準化

平田さんの経営規模は、水稲2.7

ha、トマトとメロンを6か所のハウスで1.5ha栽培しています。
トマトは8月に定植し2月まで収穫する抑制栽培が60a、10月に定植し6月まで収穫する長期栽培が50aの2通りです。メロンは40aで8月に定植し11月に収穫します。労働力を平準化するために、この栽培方法に落ち着いたと言います。7月だけが何も植えない時期とのこと。

農作業にあたるのは、平田さん夫婦に今年4月から就農した25歳になる息子さんに加え、中国人実習生2人と地元の女性を妻に持つカンボジア人の計6人です。

多忙な日々ですが、「若い時から毎週日曜日は農休日にして」と言い、可能な限りハウスの自動化に取り組みしているそうです。
「為せば成る、為さねば成らぬ事も、成らぬは人の為さぬなりけり。中学時代に知った言葉だが、それ以来この気持ちで今日までやってきた」

●好きな言葉

為せば成る

「為せば成る、為さねば成らぬ事も、成らぬは人の為さぬなりけり。中学時代に知った言葉だが、それ以来この気持ちで今日までやってきた」

●法人化を検討

元々、約1.7haの耕作面積だった農地を、2.5倍まで規模拡大してきた平田さんは、「これ以上、拡大するためには法人化するしかない。するしかない、いま瀬戸際にある」と言います。「労働力は確保できるが、息子と同年代でやる気のある青年がもう一人いれば何とかなるのだが・・・」と、現在、思案中です。